

7. 過去5年間の術前補助化学療法—特にTS-1の治療効果について—

石上享嗣, 小河原克訓 (千大)

過去5年間の術前補助化学療法についてまとめ、とくにTS-1の治療効果について調べた。過去5年間ではオイルブレオ、ペブレオが全体の7割、TS-1が2割の使用頻度であった。TS-1の奏成功率は64%と高く、重篤な副作用も少なく使いやすと考えられた。複数のリンパ節転移や早期遠隔転移症例ではTS-1の奏成功率が0%であり、TS-1の有効性が予後の指標、今後の治療方針の参考となると考えられた。

8. 術後せん妄の臨床的特徴に関する検討

武井雅子, 椎葉正史 (千大)

術後管理に問題となる術後「せん妄」について、当科で行われた全身麻酔手術540症例を検討した。41症例(8%)に術後「せん妄」の発症を認め、悪性腫瘍の初回根治手術にのみ発症した。その中で発症頻度を各項目別に検討したところ、病名が最も重要な危険因子であり、さらに年齢・性別・術式・手術(麻酔)時間・ICU管理・基礎疾患が「せん妄」の誘発要因であることが示唆された。

9. 重症化した歯性感染症の1例

村野彰行 (鹿島労災)
丹沢秀樹 (千大)

左下7番根尖性歯周炎および口底部から頸部にいたる蜂窩織炎。初診時、呼吸困難の訴えあり、また腫脹増大に伴う呼吸困難の増悪が懸念されたため、即日入院とし気管切開、全身麻酔下にて切開排膿を行った。舌下隙・頤下隙・顎下隙・翼突下顎隙・側咽頭隙を開放し、ドレナージを行ったところ悪臭を伴う灰白色の排膿が認められた。症状は著明に改善し、消炎後、原因歯の抜歯を行った。

10. 下顎埋伏智歯抜歯症例におけるQOLについて

渡邊俊英, 山木 誠, 金沢春幸
(君津中央)

下顎埋伏智歯抜歯が患者のQOLにどのような影響を与えているかアンケート調査を行った。対象は119名、男性61人、女性58人。疼痛は抜歯翌日が最も強く一週間後にはほぼ消退していた。腫脹は抜歯後2日が最も強く、一週間後にはほぼ消退。開口障害は抜歯翌日が最も強く、一週間後にはほぼ消退。話しづらさは抜歯後3日間程度続き、食事のしづらさは抜歯後1週間持

続する。日常生活は抜歯翌日が最も制限されるといった結果となった。

11. 重症心身障害児におけるビタミンK欠乏による抜歯後出血の1例

甲原玄秋 (千葉県こども)

ビタミンK欠乏による凝固障害から重度心身障害児(9歳女児)の抜歯後出血例を経験した。患児は長期間経管栄養で管理され、呼吸不全も伴い気管切開後、人工呼吸器で管理されていた。交換期の乳歯を抜去したが、数時間後出血をきたし、やや止血は困難であった。PT・APTT延長、PIVKA-II増加がありVit K欠乏が疑われた。Vit Kの補充によりPT・APTTなどの改善と止血が得られた。患児は下痢が10日続いており、腸管からのVit Kの吸収障害に起因したものと思われた。

12. 成田赤十字病院歯科口腔外科の診療統計

村野彰行, 東壽一郎, 宮 恒雄
(成田赤十字)

開設から現在までの4年間の診療統計について報告する。初診患者数は4,107名で1か月平均89.3人であった。年齢別では20歳代が最も多く20.1%であった。院外からの紹介患者は、2,109名で紹介率51.4%であった。院内の紹介患者は、内科・耳鼻科・整形外科の順で多かった。地域別患者分布では成田市が、疾患別では智歯周囲炎が、救急患者疾患別分布は裂創を含む外傷が、最も多かった。

13. 口腔電撃症の1例

金子哲治, 小松聖美, 富沢健一郎
武石越朗, 富樫 啓, 佐藤栄需
辺 夏蓮, 佐久間知子, 菅野 寿
川壽建治 (福島県医大)

今回我々は、電気コードを噛んで、舌および頬粘膜に生じた小児の口腔電撃傷を経験したのでその概要を報告した。患者は6歳1か月の男児。受傷後、他院にて処置を受け、6日目に疼痛が悪化したため創傷処置を目的に当科受診した。壊死組織除去と人工真皮移植術を施行し、術後1か月ほどで創傷の治癒が得られた。電撃傷は受傷から数日後に進行性に重症化するため、受傷後は注意深く経過観察する必要がある。